様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２０８

研究課題名（和文）近現代フランス文学におけるモニュメントの諸相

研究課題名（英文）Aspects of Monuments in Modern French Literature

研究代表者
田中　琢三（TANAKA, TAKUZO）

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：５０６１０９４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19世紀後半から20世紀初頭のフランス文学におけるモニュメントの表象について検討した。第一に、エミール・ゾラの小説で描かれたモニュメントについて研究し、ゾラの作品におけるこれらのモニュメントの機能を明らかにした。第二に、パリのパンテオンや戦没者記念碑など国家のアイデンティティーを体現するモニュメントを多く描いたモーリス・バレスの小説を分析することによって、バレスのナショナリズムとモニュメントの関係性を照らし出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来のモニュメント研究では、歴史学、社会学あるいは政治学の観点からモニュメントを考察していたが、本研究では、文学研究の観点から言語によるモニュメントの表象を分析した。文学作品でモニュメントが描かれるとき、作者の美学や思想に応じて、その意味やイメージが新たに創造される。本研究の意義は、こうした文学におけるモニュメントの再創造のあり方を検討することによって、モニュメント研究の新たな可能性を切り開いたことにある。

研究成果の概要（英文）：In this research, we examined the representation of monuments in French literature from the second half of the 19th century to the beginning of the 20th century. First, we studied the monuments described in Emile Zola's novels and elucidated their function in his works. Secondly, we elucidated the relationship between Maurice Barres's nationalism and monuments by analyzing his novels that depict many monuments embodying national identity such as the Pantheon in Paris and war memorials.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学　文献学　政治思想

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

出来事や人物の「記憶」を後世に残すために作られた記念建造物や記念碑は、歴史学や政治学の分野で研究されてはいたものの、文学作品におけるモニュメントの表象をテーマにした研究は極めて少なかった。この欠落を埋めるべく、研究代表者である田中琢三は、専門であるエミール・ゾラの著作で数多くのモニュメントが言及されていることに注目し、研究分担者の高橋愛、中村翠、福田美雪とともに、2014 年 10 月に広島大学で開催された日本フランス語フランス文学会秋季大会で「近代フランス文学におけるモニュメント：記憶・複製・再創造」と題したワークショップを行った。ここではゾラの作品におけるモニュメントの表象を分析し、文化の創出の場としてのオペラ座、風景描写における鐘楼、政治的イデオロギーを具現化するマリアンヌ像やサン・ピエトロ大聖堂など、文学作品におけるモニュメントの多様な機能を明らかにした。本研究は、モニュメント研究の可能性を示したとして出席者から高く評価されたこのワークショップの成果をさらに発展させたものである。

２．研究の目的

本研究は、近現代のフランス文学が、パリをはじめとする各地のモニュメントをどのように表象しているのかを検討することを目的とした。具体的には、『ルーゴン・マッカール叢書』（1870-1893）に代表されるゾラの小説において描かれた一連のモニュメントが、作品中でどのような美学的、物語的、思想的機能を担っているのか、あるいは、それらのモニュメントが伝える「記憶」がゾラによってどのように「再創造」されたのかを考察する。また、ゾラと同時代やその後の時代の文学作品における、モニュメントの機能や、その「記憶」と「再創造」の表れ方について比較分析する。そして、フランス近現代文学におけるモニュメント表象の特徴を、時代による差異を視野に入れつつ、歴史学や社会学などの他領域の研究を参照して多面的に分析することによって明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

これまでのモニュメント研究が、歴史的、文化的あるいは政治的観点からモニュメントそのものを分析していたのに対して、本研究の新しさは文学、つまり言語表現によるモニュメントの表象を検討することにあった。文学作品ではモニュメントが表象されるとき、作者の美学、思想、イデオロギーによって、あるいは物語におけるモニュメントの役割に従って、そのモニュメントの意味やイメージが新たに創造される。本研究はこうしたモニュメントの「再創造」の過程に注目し、それを特にモニュメントが伝える「記憶」と関連させながら考察した。これは歴史学者ピエール・ノラ（1931-）が提唱した「記憶の場」の概念を参考にしたもので、モニュメントが言語によって表象されることで、モニュメントが伝える「記憶」がどのように「再創造」されるのかを検討することを主眼とする。ただしノラのように国民や民族の「集合的記憶」を問題にするのではなく、個々の作家や作品におけるモニュメントの意味やイメージ、あるいはその「記憶」の「再創造」の表れ方を分析した。本研究では、以上のような方法に基づきながら、研究代表者の田中と 3 名の研究分担者の計 4 名がそれぞれ個別に研究を実施した。

４．研究成果

本研究の初年度は、研究代表者の田中が、イデオロギー色の強い後期ゾラの小説『ローマ』（1896）を取り上げ、この作品に登場するローマのモニュメント、特にヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂がどのように表象されているのかを、おもにゾラの反カトリック思想と関連付けながら分析し、その成果を学術雑誌に論文として発表した。また、研究分担者の中村は、ゾラの『ルーゴン＝マッカール叢書』の第 8 巻『愛の一ページ』（1878）において、新オペラ座とサントーギュスタン教会というパリのモニュメントが、作品の時代設定と齟齬をきたしながらも描かれていることに注目して、その潜在的な意味をゾラの書簡や草稿等から検討し、その成果を学術雑誌に論文として発表した。これらの論文では、エミール・ゾラの小説に登場するモニュメントの思想的、象徴的あるいは物語的な意味を探ることによって、ゾラの作品におけるモニュメントの機能の一端を明らかにした。具体的には、この作家が、『ローマ』においては、モニュメントが喚起する記憶やイメージを自らの政治的イデオロギーを正当化するために用いていること、そして、『愛の一ページ』においては、モニュメントの視覚的効果によって描写あるいは物語にダイナミズムを生み出そうとしていることが確認できた。

本研究の二年目は、研究分担者の高橋が、パリのヴァンドーム広場にあるナポレオン円柱に着目し、ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』の小説、具体的には『獲物の分け前』『居酒屋』『壊滅』『愛の一ページ』における登場人物たちと、ナポレオン伝説のモニュメントといえるこの円柱との関わりに注目して、ナポレオン円柱に対する作中人物の多様な視線の意味を政治的、社会的な観点から検討し、その成果を学術雑誌に論文として発表した。

また平成 28 年 12 月 22 日に、お茶の水女子大学で北海道大学准教授の竹内修一氏の講演「アンドレ・マルローのパンテオン（1964 / 1996）」を開催した。竹内氏は、パリの代表的なモニュメントのひとつであるパンテオンで 1964 年に挙行されたジャン・ムーランの国葬を紹介するとともに、葬儀の際に行われたムーランに対する作家であり、政治家でもあるアンドレ・マルローの追悼演説を詳細に分析して、フランス第五共和政初期のパンテオン葬が有する政治的、イデオロギー的な意味を明らかにした。

平成 29 年 10 月 29 日に名古屋大学東山キャンパスで開催された日本フランス語フランス文学会 2017 年度秋季大会において、北海道大学准教授の竹内修一氏をコーディネーター、研究代表者の田中と研究分担者の福田をパネリストするワークショップ「パンテオンと作家たち」を実施した。このワークショップでは、第三共和政以降にパリを代表するモニュメントのひとつであるパンテオンで行われる国葬、つまりパンテオン葬を取り上げ、田中がヴィクトル・ユゴーの、福田がゾラの、竹内氏がアンドレ・マルローとアレクサンドル・デュマのパンテオン葬について報告した。これらのパンテオン葬の検討によって、フランスという国家と文学が取り結ぶ関係の変遷について明らかにした。パリのパンテオンはフランス共和国の「偉人たち」が埋葬された霊廟であり、いわば共和主義の象徴としての墓であって、ナショナルアイデンティティとしてのモニュメントである。そのパンテオンに文学者が埋葬されることの政治的意味を探ること、あるいはそのようなパンテオン葬を同時代の文学者がどのように描いているのかを検討することが、モニュメント研究の重要な課題となりうることがワークショップにおける報告を通じて確認できた。このようなその成果を踏まえたうえで、田中と福田はそれぞれ異なった視点からゾラのパンテオン葬を検討した論文を学術雑誌に発表した。

本研究の最終年度は、研究代表者の田中が、ゾラと同時代のモーリス・バレスの小説に登場するモニュメントとナショナリズムの関係についての研究を進めた。そして、その成果を平成 30 年 10 月 21 日に明治大学駿河台キャンパスで開催された日本比較文学会第 56 回東京大会において発表した、「モーリス・バレスとドイツ：モーゼル川流域の戦争モニュメントをめぐって」と題されたこの発表の内容は、今後、フランス語の論文にまとめて学会誌に投稿する予定である。平成 30 年 11 月 22 日にはお茶の水女子大学に東京理科大学准教授の中丸禎子氏を招聘して人魚姫のモニュメントにおけるナショナル・アイデンティティの問題を扱った講演「人魚姫像をめぐる人々」を開催した。本研究の総括として平成 31 年 3 月 3 日にお茶の水女子大学において公開の成果報告会を開催し、研究代表者の田中と 3 名の研究分担者がそれぞれ口頭発表および出席者との質疑応答を行った。

本研究の成果は以下の通りである。まず、ゾラやバレスの小説で表象されたモニュメントの物語的・思想的・政治的意味を探ることによって、文学作品においてモニュメントが果たすさまざまな機能を明らかにした。さらに、パリのパンテオンや戦没者記念穂などのナショナル・アイデンティティーを体現したモニュメントをめぐる文学者の言説を検討することで文学者とモニュメントが取り結ぶ政治的・イデオロギー的な関係性を浮き彫りにした。以上のような成果によって、モニュメントをテーマとした文学研究の可能性を切り開くことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① 高橋愛「ゾラにおけるモニュメントを見る眼」、『北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』、大阪大学、2020 年 2 月刊行予定（査読無）

② 田中琢三「政治的事件としてのゾラのパンテオン葬」,『お茶の水女子大学　人文科学研究』, 第 14 巻, お茶の水女子大学, 2018 年 3 月, 109-119 頁（査読有）

③ 福田美雪「第三共和政の危機：エミール・ゾラのパンテオン葬」、『フランス文化研究』第 49 号、獨協大学外国語学部、2018 年、99-123 頁（査読無）

④ 高橋愛「ゾラにおける第二帝政下のナポレオン伝説――ヴァンドーム広場のナポレオン円柱と複数の視線――」、『社会志林』、第 64 巻第 3 号、2017 年、1-10 頁（査読無）

⑤ 田中琢三「ゾラ『ローマ』におけるサン・ピエトロ大聖堂」、 『お茶の水女子大学　人文科学研究』、 第 13 巻、お茶の水女子大学、2017 年 3 月、111-120 頁（査読有）

⑥ 中村翠「モニュメントのアナクロニズム：ゾラの『愛の一ページ』をめぐって」、STELLA : études de la langue et littérature française、第 35 巻、2016 年、59-69 頁（査読有）

⑦ 福田美雪「開かれたパンテオン：プレイヤード叢書をめぐって」、『文学』、第 17 巻、2016 年、59-73 頁（査読無）

⑧ 高橋愛「ゾラ『愛の一ページ』における感覚の諸相」、『社会志林』、第 63 巻、2016 年、79-90 頁（査読無）

〔学会発表〕（計 5 件）

① 高橋愛「セザンヌ－ゾラ書簡における画家と作家の関係」、国際シンポジウム「セザンヌとゾラの創造的関係を考える」、日仏美術学会、於京都工芸繊維大学、2018 年 12 月 2 日

② 中村翠「ゾラの『パリ』におけるロンドン滞在のレミニサンス：ピカデリー・サーカスのモニュメント」、自然主義文学研究会、新潟大学、2018 年 10 月 27 日

③ 田中琢三「モーリス・バレスとドイツ：モーゼル川流域の戦争モニュメントをめぐって」,、日本比較文学会第 56 回東京大会、明治大学駿河台キャンパス、2018 年 10 月 21 日

④ 福田美雪「真実は前進する：エミール・ゾラのパンテオン葬」、日本フランス語フランス文学会 2017 年度秋季大会ワークショップ、名古屋大学東山キャンパス、2017 年 10 月 29 日

⑤ 田中琢三「ヴィクトル・ユゴーのパンテオン葬」、日本フランス語フランス文学会 2017 年度秋季大会ワークショップ、名古屋大学東山キャンパス、2017 年 10 月 29 日

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：高橋　愛

ローマ字氏名：TAKAHASHI AI

所属研究機関名：法政大学

部局名：社会学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：80557281

研究分担者氏名：中村　翠

ローマ字氏名：NAKAMURA MIDORI

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：芸術学部／美術研究科

職名：講師

研究者番号（8 桁）：00706301

研究分担者氏名：福田　美雪

ローマ字氏名：FUKUDA MIYUKI

所属研究機関名：獨協大学

部局名：外国語学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：90632737

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。